

オヤジ

えと題字・村上豊

老いても人を驚かす

もりもと
森本あんり

(国際基督教大学教授)

わたしの父は絵描きである。戦後すぐの武蔵美へ通ったが学費が続かずに中退し、その後は証券会社に勤めてグラフィックデザインなどを担当した。退職してからも絵画教室や美術団体役員などを続けてきたが、七十六歳のとき何と母と二人で上海へ移住してしまった。そこから各地へ絵の講師として招かれたり、植樹のボランティアに出かけたりするようになった。はじめはわたしも年寄りの与太話くらいに聞いていたが、そのうちインターネットや外国語雑誌にも本人の活動が紹介されるようになって、どうやら本当らしいと悟った次第である。

わたしも二度ほど様子を見に行ったことがある。父も母も、現地語は片言しか

できない。市場への買い物についていくと、こちらは日本語で、あちらは中国語で、お互いに遠慮なくまくし立てるばかり。それでどうにか意思疎通ができていくのだから不思議である。何となく「人間っていいな」みたいなほっこり感をもった。対日感情が悪化した時期もあった。



お

たが、そんな世評にも惑わされず、親切な人びとに囲まれて楽しそうに暮らしているのを見ると、父もあれで案外よい人なのかな、という気がしたものである。

何事にも熱しやすい性格で、若い頃は日本共産党の活動に熱心だったようである。本人が多少自慢げに語るころによ

ると、当時の公安に目をつけられて以来、今でも監視対象なのだそうだが、さすがに当局もそこまで暇ではあるまい。

代々木との関係も話半分聞いていたが、何と先日は党本部へ出向き、不破哲三氏の応対を受けて謝意を示されたという。若い頃の父は、画才を生かして機関誌のカット絵を描いていたとかで、資料室にあった現物のいくつかを写真に取らせて見せてくれた。GHQの検閲を逃れるため、いずれも表紙には『苗木の育て方』『電気溶接』など、いかにも人畜無害な題と絵が掲げられているが、頁を開けると中身はすべて党の行動指令や闘争方針なのだそうである。題にも暗号めいたところがあり、例えば『球根栽培法』なら徳田球一の論文が掲載されていることを示すのだ、としたり顔に解説してくれた。真偽のほどはともかく、スパイ小説じみていてちょっと面白かった。

齢九十を過ぎ、今は帰国して大人しく暮らしているが、これからも意外な面であつたを驚かせてくれるかもしれない。